

Project 1

研究活動報告

黒澤 満

プロジェクト1の研究課題は「国際共生の研究」であり、国際社会における共生の現状分析および将来あるべき国際共生の姿を研究対象としている。具体的には、国際の平和と安全保障、人権の国際的保護、持続可能な開発の促進、地球環境の保護、多文化共生社会の構築、人間の安全保障など、国際社会に生起する重要課題を総合的に研究し、全体として国際共生の学問的体系化を志向するものである。

プロジェクト1の研究員全員による現在の研究活動の中心は、大阪女学院大学国際共生研究所叢書3として『国際関係とは何か—平和で公正な世界へ』を出版することである。この企画は2011年後半から開始され、同年11月には「公正で平和な世界へ：国際共生の意義と役割」と題するシンポジウムを開催し、黒澤満本学教授の司会の下で、佐々木寛新潟国際情報大学教授の「『国際共生』概念の積極的な意義について」、千葉真国際基督教大学教授の「共生の多様な意味合い」、奥本京子本学教授の「過程としての国際共生：紛争転換の視点から」の報告に基づき議論を行った。

2012年1月には、「環境問題講演会—国際共生の観点から」と題して、西井正弘本学教授司会の下で、井上真東京大学教授の「自然資源の『協治』から『国際共生』を考える」、高村ゆかり名古屋大学教授の「『対立』か『強調』か—気候変動問題と国際共生」の報告に基づき議論を行った。

2012年7月には公開研究会として「人権と国際共生のあり方」を開催し、香川孝三本学教授司会の下で、土佐弘之神戸大学教授の「ジェンダー平等と多文化主義」、川村暁雄関西学院大学教授の「人権と国際共生」の報告に基づき議論を行った。

2012年11月には公開研究会として「教育における国際共生」を開催し、馬淵仁本学教授の司会の下で、高橋朋子近畿大学講師の「母語教育とアイデンティティー—日本生まれの中国にルーツを持つ子どもたちの場合」、乾美紀兵庫県立大学准教授の「進学問題と教育支援—ニューカマー児童・生徒の場合」の報告に基づき議論を行った。

2013年1月には公開講演会として「開発と国際共生」を開催し、西井正弘本学教授の司会の下に、勝間靖早稲田大学教授の「貧困をなくすミレニアム開発目標へのアプローチ」、高柳彰夫フェリス女学院大学教授の「『援助』効果から見るNGO・市民社会の役割」の報告に基づき議論を行った。

これらの5回にわたる研究会での議論においては、研究所員を初め多くの参加者から質問やコメントが寄せられ、その後、これらの10人の報告者に、そこでの議論を踏まえて論文の執筆を依頼した。研究所叢書の全体については黒澤が責任を持ち、第1章「平和と国際共生」は奥本が、

第2章「人権と国際共生」は香川が、第3章「環境と国際共生」は西井が、第4章「開発と国際共生」は前田美子教授が、第5章「教育と国際共生」は馬淵が担当した。本書の構成は、国際社会における国際共生の重要な領域をカバーすることを念頭に、平和、人権、環境、開発、教育の5分野にわたるものである。

各章の担当者は、そのテーマに関して2人の専門家を招いて公開講演会を開催し、2人の専門家が執筆する論文の編集を行い、各章2編で合計10編の論文は、執筆の後に6人の研究員全員がすべての論文に対してコメントを提出し、担当者を通じて

執筆者にそれらを伝え、コメントを踏まえた最終論文を再度提出してもらうという手続きで本書の作成を行った。その意味で、本書は10人の執筆者と6人の所員との協力によるものである。

プロジェクト1は、今後も「国際共生とは何か」に関する研究を継続し、国際共生のさまざまな側面を明らかにすることを計画しており、特に今回は研究所所員による国際共生の具体的な側面における研究として「国際共生の基本問題」について研究を続けていくことを予定している。

プロジェクト1の研究活動の第2の柱は、「平和・人権研究会」を2カ月に一度開催することであり、研究所員のみならず、大阪女学院に連なるさまざまな研究者に報告をしていただき、活発な議論を継続している。その内容は3頁に示されているが、この研究会の開催は、国際共生研究所の継続的な研究体制の維持に重要な役割を果たしていると考えており、今後も積極的に開催していく予定である。

第3の柱は、その折々に特に外国からのゲストを迎えて、その人の専門領域での報告を聞き、所員のみならず、学内外の関係者を集めて、議論し情報交換することであり、この内容も別に示されている通りであり、今後も進めていく予定である。



講演会報告

テーマ：『国際共生』とは何か
本学大学本館会議室



2013年4月12日、ヨハン・ガルトゥング博士（NGO「トランセンド」主宰）による講演が、本研究所主催、トランセンド研究会及び日本平和学会関西地区研究会による協力の下で実施された。以下は、講演内容の要旨である。

一般に「共生」とはポジティブな概念としてとらえられているであろう。それに対して「国際」とは現在の国際情勢を鑑みるとネガティブな印象が強いのではないか。この2つの概念を合わせると、何が言えるか。東北アジア地域を例にとって考えてみよう。

まず、「共生」の概念にあるものは、Conviviality（饗宴、「共生」とほとんど同義）、Tolerance（寛容）、Conversation（会話）、Commonality（共通性）の4点であろう。今までの（日本の）「共生」概念には、垂直構造や集団的指向により暴力が忍び込む可能性があったかもしれない。そこでは、均衡な関係を築くのが難しかった。家族・隣近所・村・宗教集団単位から発生した「共生」概念は、国家・国際レベルにおける共生には、本来そぐわない。

しかし、東北アジアを考えると、「国際共生」によつての解